



Title	六方ことばの系譜
Author(s)	田中, 章夫
Citation	語文. 1982, 40, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68694
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

六方ことばの系譜

田 中 章 夫

一、六方ことば

六方ことばは、江戸時代初期の一七世紀中ごろ、腰に大刀を帯びて、変わった身なりで江戸市中を徘徊し、六方者などと呼ばれていた旗本奴・町奴が使いはじめた、独特なことばである。これは、奴ことばとも言われ、柳亭種彦の隨筆「用捨箱(天保一二年刊)」にも、

「昔奴どとなへしは男達の事なり。故に当時は寛闊の字をやつこと訓す。或は六方者といふ事は昔々物語にも出て人の知るところなり。詞もなまぬるきを忌、片言を好みていふ。かたじけないを、かたじけないと、泪をなだ、とつむるの類かぞへも尽し難し。事をこんだ、うちかくるをぶつかける、いはゆる関東べい也。その様をかぶきに似せ、小袖のゆきいと短く無反の要刀もつとも長きを門にさしこらし手を振つて動き出。彼六方詞、名のり詞などいふを、演て後狂言にかかるが並て當時の風なり。おかしき事とは思はれねど昔は専ら行れしと覚しく、その六方詞のみ集めし畫草紙數種あり。当時の流行思ひ

やるべし」

六方ことばについては、早く松川弘太郎の研究^(注1)があり、最近は、また、道井登による詳細な考察が発表されているが、そうした調査・研究によって、六方ことばの特徴として指摘されているのは、つぎのような点である。

促音・撥音を伴う接頭語——

トッヅク・ヒツク・カツツク・メッ
ツク・ブック・ブック・カケル・ブックボス・ブツケル・ブツ
クダク・ブチラス・ヒック・ヒッチギル・ヒッバル・ヒッ
タクル・ヒッサゲル・ヒッ噴ム・ヒッ違ウ・ヒツケル・ヒッ
ツル・ヒッタツ・ツツタツ・ツットブ・トツチメル・ノツチメ
ル・カツチメル・ウツチャル・ウツ惚レル・オツ切ル・カツ
張ル(殴る)・カツカジル
ツンヌメル・ツン出ル・ツン出ス・ツンナゲル・ツンナグル・
ツンノコル・ツン漏ル・ツンナスル・ブンデル・ブンマク・ブ
ンマワス・ブンマカス・カンナグル・カン泣ク・カンナジル・
クン飲ム・ヒン卷ク・ヒンノセル・ヒンナグル

接尾語「ムコイ」——スル・ムコイ・ムシツコイ・ヒヤツコイ・サム

音の脱落——ナダ（涙）・アニ（何）・アゼ（何故）・ヤダ（厭だ）形容語——デカイ・イカイ・ザブトイ・ダタビロイ・ウルシイ（嬉）

・オモクロイ・キセチナイ（氣忙しい）・イケナイ・ガイナ・カタジュー・ケナイ・ガイナ

副詞——ナンノカンノ・ドッコイ・チヨイト・トットト・チットモ

チャント・ワンズカ（僅）・ヤタラニ・メツタヤタラ・タント・ゲニ・スラクラ

感動詞——コリヤ・コレサ・ヤラ・シンゾ（ほんとに）・アタソコ

その他——シャツツラ（顔）・切レッパン・メロー（女）・メンバチ

（飯碗）・ホデブシ（腕節）・ホテッバラ（腹）・ホザク（言う）・サ

ヘル（言う）・口をタタク（言う）・ホノジル（惚れる）・イゴキ（動き）がトレヌ・太ク出ル・光ヲクレル（威勢をつける）・ノメリ出ル（歩きまわる）・イッケ（言つたつけ）・アッタモノデハナ

イ（たまたまではない）・オモシロノム・アラタノミ

以上のはか、終助詞の「モサ」「サモ」や文末の「スルコンダ（する事だ）」、あるいは、「来る」の命令形「キロ」なども特色とされるが、六方ことばを、もつとも特徴づけるのは「よかんベイ」「行くベイ」といった、いわゆる関東ベイの使用である。

わんざくれぶんばるべいかけふばかり
あすはからすがかつかじるべい
これは、「武江年表」承応三年の条に見える、六方ことばで詠んだ辞世の和歌である。詠者は、山中源左衛門という男伊達で、正徳年中麿町真法寺で切腹した時のものという。

六方ことばの特色は、このように、関東方言の色彩が、きわめて濃厚なことであるが、さきにあげた語例からもわかるように、全体に、たいへん乱暴で卑俗なことばづかいである。しかし、そうした方言色や俗語臭と一緒に、六方ことばには、文語的な、やや古めかしい固い言いまわしもまた、同居している。これも一つの特色といふことができる。

たとえば、「ユイモウス（言申す）・見モウサ（見申す）・クレメサレ（下さい）・ミナサロ（みなされ）・メンワル（召上る）・マイリタ・マラス・タマウ・ハベル・オクス・候・ハジキイダス（口に出す）・

イズル・ミニル・ミカヌル・ミワタイタル（見渡したる）・ユラルル・ナガムレバ・心憂キ・イト（大変）・但シ・イデヤ」などが、その例である。

喜多村信節の「嬉遊笑覽」には、六方ことばの例として、曾我狂言の朝比奈のせりふをあげているが、朝比奈のせりふについては、「歌舞伎年代記」卷一にも、左のような記述がみられる。

扱まと朝比奈の、せりふの工夫は、上方の言葉にも似合まじ。関東ベイの中に、おかしき言様こそあらん。と思ふ時に、遠き田舎より、山出しの乳母を置ける。未だ江戸馴ぬ者故。一寸いふことに。「それでつぼうがあべいときやアるによつて、早くたくりつんでるこんだア。性はりな子だアもさア、いふことをお聞きやりもふさねへと。ちい／＼に喰せるよ」杯といへるを聞いて、是こそと朝比奈の言語に真似て、荒事をせしといふ。

すなわち、朝比奈のせりふは、荒事のせりふの典型とされたわけであり、曾我狂言が六方ことばの普及に一役かつたことは想像に難

くない。そこで「男伊達初買曾我」の朝比奈のせりふを、少し引用してみよう。

「うぬは朝比奈をもなめる思案か。太い奴だ。所詮うぬが様な毒虫を生けて置けば人種がない。いつそ頭を叩きみしやいで、溝へうつちやるべい。覚悟ひろぎやアがれ」

「扱こそ、無性に駆出すは、碌なことぢやあんまいと、おつ留めたが、兄イ。討たば共にと言交した兄アを出しないて、獨り手柄をして手向けちやア、未來の河津が受取らない。朝比奈が悪い事は云はない。いい子だ、留まれ。應つと云つて留まつて呉れたならば、近頃忝なすびの香の物を入れた漬汁だもさ」

「面白い。然らば正月遊びの宝引きの代り、一番草摺引きと、つんでべいわやい」

こうしたことばは、おそらく、当時の江戸庶民のことばからみれば、かなり時代がかった大仰なものに感じられたにちがいない。伊達をきそつて、相手に、ことさら尊大に高圧的に応対するのを常とした、六方者の生態と意識が、このような仰々しい言いまわしを選びとつたともいえるが、一つには、六方ことばの基礎が、武士ことばにあつたためであろう。

(注1) 松川好太郎「六方言葉の考察」(江戸時代語研究)一巻・一号)、「六方言葉語彙」(同上)、一巻・三号)、道井登「奴言葉(六方詞)の研究」(密田教授退官記念論集)

二、六方ことばの流行

六方ことばは、簡単にいってしまえば、ことさらに関東方言をと

り入れた、きわめて粗野な武士ことばであり、はじめは、旗本の不良息子や、武士氣取りの無賴の徒の間で使われ始め、次第に、中間・小者といった武家の従僕や、博徒・遊び人などに広まっていった。こうした、いわゆる、かぶき者・男伊達の用いる、六方ことばは、やがて、江戸市民の興味をひきつけ、さきに引用した、「用捨箱」の記述にあるように、さまざまなかたちで、たいへんな流行をみた。

例えば、六方ことばで詠んだ俳諧なども、しきりに行われ、これは、奴俳諧と呼ばれ、柳亭種彦も、「足薪鏡記」の中に、

正保年間の作、百物語三四段に「近頃奴俳諧とて人のしける
を聞きしに、冬の事なりしに」

春水にあたまかつばる氷かな
といふ句に、又付ける

しやつらざむき雪の明ぼの

とあれば古き戯れなり。

と、「百物語」の中の奴俳諧を紹介している。また、一七七一年(寛文12)に刊行された、芭蕉の判になる句合せ「見おほひ」にも、春の歌やふとく出申スうたひ初

紅梅のつぼみやあかいこんぶくろ

消残る雪間やもろあしふんごんだ

種ならばまかせておける花ばたけ
鎌ができる音やちよい／＼花のえだ

ゆかしきや山の尾常はなきやるもの

小六方のホざしや菖蒲かたなの身

これさ爰許へ、小六方とほさけだいたるでつちは、うるしいこ
んではあるぞ。

と、六方ことばが数多くよみこまれ、芭蕉の判詞にも六方ことばがみられる。

六方ことばは、江戸歌舞伎にも、早くからとり入れられ、すでに一六七八年（延宝6）刊行の「古今役者物語」に、多門庄左衛門といふ役者の、左のようなせりふが出ている。

なざけなや若衆めになやまれまらつて、たよりや御わりやまら

せぬ、今日はやなか日蓮ぼうへさんけいをいたして、お高僧のおにかかつて、我御むしんを申氣だ。かるくききめさつて、若衆めが氣相平ゆふいたいたら、れいぶんには代々まぐつたるわちがいじゆすをおつ切て、妙法のきづなにとつつくかんだ。

△かんわうしにてのことば

とかふいふうちに、かんのふしに付たり、佛らしきものはめいなが、これおこうぞ月より星より大せつにけんするわかしゆめに、病がとつつかれてからだをくるしみ申、一七日がうちによくしておくりやつ、是おこうそうとは申さない、しゃつたらをひつかき申す（以下略）

有名な、花川戸助六のせりふなども、六方ことばの流れをくむものであり、「助六由縁江戸桜」の中から、少し引用してみよう。
助六「いかさま、この五丁町へ脚をふんごむ野郎めらは、『○』が名をきいて置け。まづ第一をこりが落る。まだよい事がある。大門をずつと潜ると、己が名を掌へ三遍かいてなめる。一生女郎にふられるといふことがなへ。（中略）金龍山の客殿から、目黒の尊像まで、御存じの江戸八百八町に隠れのねへ、沓葉牡丹の紋付も、

くてこよこせおつとがてんだ心得たんぼの川崎。(中略)

相州

小田原とうちん香隠れござらぬ。貴賤群集の花のお江戸の花うる
らう。あれあの花を見てお心をおやはぎやつといふ。(中略)
ホホ敬^{まつまつ}で。うむらうはいらつしやりませぬか。

(「歌舞伎年代記」卷之二)

「しほばころび」「さんだす」「おきやがれ」など六方ことば風の
ものがみられる。

こうした、歌舞伎のせりふから、当時の物売りや商人の間にも、
六方ことばが行われていたことが、推定されるが、大道商人や、町
々をまわる職人の風態を写した「いとなみ六方」という草紙も残さ
れている。

なまこうり

こりやぬらりくらりと、ぬめりぬめつていてたるおのこはうわべ
はつめたけれども、とつくととりいりになつておみやれ、こた
たみをして、このわたのやうなるおでまくら、八まんふりこにせ
らるるこんではない。

なべのいかけ

こりや君にのひづづとでた、はるのくわんすと云おのこ、おなべ
どのおちやがまのあなたば、ほかにふさぐものはおりない、
君かめしかまにしたかつて、まつひるなかでふきにくるこんだは。
つきものし

こりや此おのこ、くわほうものではおりないか、此ほどさんやに
かくれない、よし野どのをせしめ申た、なにものがはなこそを
かうても、かわるまひとの御なさけ、うるしいく、かたぢうけ
ない。

などが、その例である。

一方、流行を追い、奇を好む、狹斜の巷にも、六方ことばは、い
ち早く流れこみ、特に、吉原のそれは、「吉原六方」と呼ばれていた。

一七〇四年(元禄17)に、由之軒政房が著した「誰袖海(たがそ
でのうみ)」の卷之二に、

吉原言葉は「呼でこいといふことを、よんできろ「急げを、は
やくうつばしろ「いてくるを、いつてこひ「ありくを、あよびや
れ「こぼすを、ぶつこぼす「わるいと云ことを、けちなこと「そ
うせよを、こうしろ「おそはるるを、うなざるる「腹の痛むを、
むしかたい「しやんなを、よしやれ(これはよしにしろの略言な
り)「こそばいを、こそぐつたい「女郎のよこぎるを、てれんつ
かふと云。(是は唐音也)おさらばゑ、さうさ、からさ、おつか
ない、さうすべい、所がらとはいひながら、島原の心では、さて
もうつくしい顔して、けうこつな物いひと、なんばたしなんでも
吹ださずといふ事なし。

とあり、「嬉遊笑覧」は、この「誰袖海」の吉原ことばを、つぎ
のように評している。

元禄年中由之軒が書ける吉原言葉の不束なる事をえり出でて記し
し處、呼で來いと云ふ事を呼んできろ(中略)なんばたしなんで
も吹きださずといふ事なし、と有り、此内今もみんなのつかふ詞
もあれど、大かたは、むかしの奴とも六方ともいへる詞なり、こ
れは男子の内にも一種の鄙言にて、狹氣をこのむものゝ詞なり、こ

其頭は遊女もこれをこのみ、奴の名を取たる者などもあり

右に出てくる「奴の名を取りたる者」というのは、巧みに奴言葉を用いて人氣を呼び、「奴勝山」というような異名をとった遊女などをさすものである。

かつて、忍頂寺務は「江戸時代語研究（第一巻・二号）」誌上に「吉原六方」という草紙を紹介したが、その内容は、左のようなものである。

是き此まきよし原六方とてた事、われ、竹馬をおりてより、おかたづかをかひにぎり、かのさとへうちこへ、あのしなものしなせぶり、此ぬれもののぬれかけや、露の情にふかくぬれ、ぬれぬさきこそ露をもいとへ、わざくれぶしにふとく出で、のめや歌へとまんはちをひつくみひつかけのむ程に、したたかゑひのましければ、ゑひのまぎれに立出で、かのちよい／＼の御さくたち、ひとり／＼に名をきけば、六はう詞になぞらへて、名のらせたまふ御ふぜい、これぞ寛に極楽の六はうごうかのいき如來、あつたものではないこんだぞ。

政常

京町 弥左衛門内

是さう世のきらしてはめいかぢおほきその中に政常がうちものよりきらすこんだは。

清原

新町 九兵衛内

これざながれをたてしよりかいてはいゑにみつどもあまはる心はいとをしくいときよはらとでるこんだは。

吉原に限らず、江戸の遊里語は、一般に、上方語的色彩の強いこ

とが、その特色とされているが、初期の吉原（元吉原）では、遊女を含めて、廓の住人の中に、近在出身が多かつたため、関東方言が、かなり行われていたといふ。^(注3)しかし、遊女や住人の、持前の関東方言とは別に、ことさらに六方ことばをまねる傾向があり、それが、右の吉原六方と呼ばれるものである。

滝沢馬琴も、「夷園小説別集」の「元吉原記」の中で、吉原六方に触れ、それを読みこんで、「おさらばへ、のしけをささり、こはしゃうし、さふさかふさは、おつかない哉」という戯れ歌を載せている。

これも、客商売・人氣商売の常として、六方ことばの流行語的な珍しさや、芝居がかったおもしろさが、遊里でもてはやされたゆえである。

（注2） 忍頂寺務「吉原六方といとなみ六方」（江戸時代語研究）第一巻
・二号

（注3） 真下三郎「遊里語の研究」（東京堂出版）・湯沢幸吉郎「鄭言葉の研究」（明治書院）

三、江戸語への流れ

六方ことばの流行は、一八世紀の初め、元禄年間に終息を迎えたとされている。^(注4)しかし、その後も、前述の曾我物や助六劇など、江戸歌舞伎に受けつがれたほか、侠客・遊民のことばとして定着する一方、物売り・大道商人など、裏店住いの零細商人や下層町人のことばにも、その強い影響を及ぼした。

一七七二年（明和8）刊行の「俠者方言」は、神田辺の遊侠の徒の生態を写した草紙であるが、その会話をみてみると

十「なんだといふこのかぶつかぢりの三太郎め。イヤふてへのろ
まだ。いわせておきやアゑゑかと思つてとひやうじもねへだた

ばな事をぬかしやアがる。うぬうたわ事をつくそのそつぼうをぶ
つかへかけへひろはせるぞ。ほんのこつたがまたおれさまがこ
う云出しちやアおどけはらつた。もうでへつでも相手だ。どんぢ
やアねへ」（中略）

皆く「コレ十。やかましいはへ。おいらがいふ事もちつときいて

くれねへか、コレ十、コレサ」

十「いんにや。きかねへへ」（下略）

吉「なんだこいつア。きかねへへ」と。へたのかへた辛子じやア
あるめへし。ふらつきやうなふぬけだア。うぬがよふなやつアみ
せしめのために。どしやうばねへふんべしょつていきの音エとめ
てやるべへ」

・用語・語法が、各所にみられ、まさに、六方ことばの直系であ
る。（注5）

式亭三馬の「浮世床」に登場する「いさみ肌の男」のことばにも
いさ「コウ湯へ行たか」びん「まだ」いさ「行て来べい。ヲ
ヲほんに。何は來ねへか。峰の野郎は」びん「来るへ」
いさ「来る。あの野郎ア達入のねへ猿だぜ。見付たら面の皮ア引
めくつて呉へい。」

の八百屋や魚屋が、上方者に値切り倒されて往生する場面が出てくる。その行商人のことばを眺めてみよう。

商人「白瓜はどうだネ。唐茄子十六角豆」（中略）その外見なさ
る通りだ。たんと買ってくんませへ。けふはべらぼうに荷が勝たか
ら重くってならねへ」けち「チト爰に待居てくだんせ」商人「お

かみさんを呼ぶのかネ」けち「食ぬ喰なら呼ぶ氣ちや」商人「お

きやがれ。何で待居るのだネ」けち「イヤ一寸取て来る」商人

「器物かエ」（中略）けち「秤と算盤」商人「秤や算盤で買居て間

尺に合ふもんか、あてこともねへ。おめへ知れ切た物だばナ。能

加減に直を付て買なせへ」（中略）アイ。是にしなせへ。こりや

ア砂村だア。いっちらも持て来るが、斯いふなアねへ。わづちら
が持て来るものは、本の事が出が達はア」けち「ハアハ」（中

略）是なんば」商人「アイ。夫で掛直のねへ所が、三十五文にして

上やう「けち」ヨウ（中略）三十五文とはゑらいぞ」商人「そ

んなに悩りす直ちやアねへ。四ツ目へ往てみねへ。本はやりで、

からッきり買附られねへ」けち「四ツ目はさうぢやらが、（中略）

ヲヲ、八文」（中略）商人「へへ、おそろしい。チヨツ、あんま

りがうはらだ。まけてやるべい」

といった具合で、ここにも、六方ことばの影響が、強くみられる。
そして、上方者が、商人たちのことばを、「チトなまろかい。何のこんだ。とほうもない。おきやがれ」と、六方ことば風にまねてみせる情景も描かれている。

滑稽本は、ことばの資料としては、江戸の下町の下層町人の言語
を写したものとされているが、一九世紀にはいって、江戸時代も終
など、六方ことばのにおいが強く感じられる。
ところで、同じ式亭三馬の「浮世風呂」の四編・巻中に、行商

わり近くなると、こうした、六方ことば風のことばは、必ずしも、遊侠無頼の徒や、太道商人にかぎらず、江戸の下層町人の男性語として、かなりの定着をみたようと思われる。

一八二〇年（文政3）に刊行された、瀧亭鯉丈の「八笑人」は、町人たちの素人芝居のおかしさを描いたものであるが、その二編上之巻に、左のような稽古の場面がある。

アバ「またおれが侍か。チヨッ兎角にくまれ役だナ」。左次「さうだけれど（中略）」「ムムいい／＼どうかからかやつつけベエ。（中略）」頭武「アバ公何でもすっぱり捨て、びっくりさせようぜ。」アバ「ムムそしておれが役廻りは此タテ計だから、所作よりタテでぶつ／＼してくれベエ」頭武「おもくれへ／＼。（中略）どうも素人細工では、胸でこせへてチヨイトおつ建ると言訳にはいかねへ。なんでも最初から立て、押合て見るが一チばん早イヨ。（中略）サア頭武公。」ツブ「ラットそれきた」

右の「ふちめてくれべえ」「おもくれえ、おもくれえ」などは、六方ことばそのままの受け答えであり、全体に、落語の熊さん八さんを思わせる話しぶりである。

熊さん八さんに代表される、長屋住まいの下層町人の場合、表通りに大店を構える商家の人々ほど、ことばの上の男女差がなかった。したがって、こうした六方ことば風の語り口は、女のことばにもみられる。

した「なんだ。此がきめエ。又啼てうしやアがつたか。見たくでもねへ。どど、どいつが打た。お髪のがきか。何だ、お醤と二人だ。あのがきめらア。惣体依怙地悪い奴等だ。なんぞの代曲にやて、泣してよこしやアがる。うぬも又、うぬだは。あいつらに泣

せられることがあるもんか。益にたゞねへ。なぜ向の面でもおもふさま引摺むしつて遣ねへ。ソシテマア、いけ外聞の悪い湯屋まで泣てうせることがあるもんか。能、／＼、待居、今おれが連居て、あの親めらに説らして呉う。全體また親めらも世間をしらねへ奴等だ。己が児ばつかり可愛がりやアがつて、他の子はくたばらうと構ねへ。長屋中鉄棒引て、人の蔭沙汰するのが眉目でもあんめへ。（中略）うぬも又、あんまりしやはげるからだは。此あまめエ」べそ「ナアニ、おいらア、おとヲなししく、あすんで居たが、やつたらむせうにいちめちらして、着物がきたねへの、貪乞人だと、色々なことを云づて、あのウ、そウしてからにした「なんだ。貪乞人だ。いらざるお世話さ。あいつが内はどれほど身上が能のだ。着物を貰て着やうじやアあんめへし、そんなことは小兒のいふ詞じやアねへ。あの親めらが不断ぬかすからのことだ。思ふさま鳴込でやるべい」

これは、「浮世風呂」の二編巻の下に出てくる母娘の対話である。それにも、なんとも、すさまじい母親のことばだが、まさに六方ことばの正統派の觀がある。

このように、元禄時代の爆発的な流行ののちも、江戸の下層社会には、六方ことばの伝統は、脈々とうけつがれていたのである。なお、右のような、六方ことば系の、粗野で乱暴な話しぶりを描いた、滑稽本の描写は、関西人などから、しばしば、作者の誇張のように評されることがある。しかし、少くとも、戦災前の下町では、このようなことばを耳にするることは珍しくなかつた。したがつて、

滑稽本の描写を、誇張とするのは当らないようと思われる。

(注4) 国語学辞典「奴ことば（中村通夫執筆）」による。国語学大辞典

は「貞享期絶滅」とする。

(注5) 「俠者方言」は江戸語資料「遊子方言」と同一作者、多田翁の作

であるが、前者は、明らかに遊侠の徒の言葉を享したもので、普通の

町人ことばの資料としては扱えない。後者については、その上方語的

色彩が、ことさらとり上げられることが多いが、上方調は、江戸の遊

黒語全般の傾向であり、遊客も、廓では、それに同調する風があった。

作者・多田翁を、大阪人の丹波屋利兵衛とする中野三敏の説「遊子

方言の作者をめぐって」国文学研究・27集）があるが、「遊子方言」

は、吉原（新吉原）を中心とした「當時の江戸語を、かなり忠実に写した

ものとしてよい。小松寿雄「江戸語の形成」（松村明教授遺稿記念・

国語学と国語史」所収）参照

四、ベランメ工調

東京の、下町ことばといふと、「江戸だつてねえ、すし食いねえ」といった、いなせな、歯切のいいベランメ工調が、「一つの特徴」とされる。泉鏡花の「婦系図」に登場する魚屋のことばなどは、その典型である。

「聞きねえ、過日もね、お前、真個はお前、一軒かけ離れて、彼處へ行くの荷なんだけれども、些とボカと来たし、佳い魚がなくて困るって言ひなさる、廻つてお上げ、とお前さんが口を利くから、チヨッお嬢ちゃんの言ふこった。脛を達引け、と二三度行つたわ。何ぢやねえか、一度お前、おう、先公、居るかいって、景氣に呼んだと思ひねえ」（中略）「すると何だ、肥満のお三さんか、ぶつちやう面をしやあがつて、且那様とか、先生とかお言ひなさい、御近所へ聞えます、と吐したらうぢやねえか。ええ、

そんなに奉られたけりや三太夫でも抱へれば可い。口に税を出すくらゐなら、憚んながら私お酒も啖はなければ魚も売らねえ」現在でも、バナナのたき売りなど、物売りのことばには、こうしたベランメ工調が、かなり残っている。岩淵悦太郎編「ことばの現代風景、（筑摩書房）」の「売手と買手——浅草風景」には、つきのような、たき売りのことばが写されている。

「大将、前こいよ かまわないから前へ そこはけつ飛ばしてかまわねえから。みんな買って下さるかたは親のような気がすつけど、買わねえ人も親のような気がすけど、なんとなくこれ、まま親のような気がしちゃう。なんでも買ってくれよ。きょうあたりはよ、風が強いし、また無理にお願いするから見切りが強いんだ。（中略）こういうもんはねエ、種まいてこやしやつてねえ、へエひつかけて裏の島で大きくなるもんと違うんだよ。糸も使えば労働も使うし、ねエ、だめかい、いらんかア、ない？ え、なけりやアこれしまさうよ。こんなあんた湯上げタオルでも、あんた買つていいくらすんの。最前のばあさんじやねえけれど、これ、東京では風呂錢あがつたんぺえに、こんなでけえ手ぬぐい使つたら石鹼相當いるだんべえなアつてづたけど、これ石鹼いらない。ええ買えばあんた二百円からしますよ、買うかい、一百円では安い。（中略）ええも、あんまり情なくなつちやつたよ。ええ、きのうの、もつとも夢見が悪いと思つたんだよ。豚にこれ、ヘソなめられた夢見たしさ、きょうあたり男つぶりもいいしねえ、負けつぶりもいいいんだけど、買いつぶりが悪い。おとつあんいらねえかい。このサージよ。いらねえ、これ、九百円だ八百円に負けてやるよ。だめかい、ええ？」（中略）おしまいで六百円に飛ばしてやれエい。

どうだい、ねえなア。おしまい」

明治のはじめ、仮名垣魯文は、「安楽樂鍋」を著し、当時の東京で行われていた、種々雑多なことばを、みごとに描き分けた。その中で、初篇に出てくる「諸工人の狹言」などは、下町のベランメエ調の元祖ともいうべき語り口である。

「エエコウ松やきいてくれあの勘次の野郎ほど附合のねへまぬけハ西東の神田三界にやアおらアあるめへとおもふぜまあかういふわけだきいてくりや夕辺仕事のこととて右衛門さんの廻へつらア出すとてうど棟梁がきてて酒がはじまつてゐるんだらう（中略）酒を見かけちやアにげれねへだらうしかたがねへからつそばへりこんで一杯やツつけたがなんぼさきが棟梁でゑくでもごちそうにばかりなツちやア外聞がみつともねへから（中略）一升とおこつたハ（中略）勘次のやらうがいいげい人のありよをしやアがつて（中略）さんざンぱらさわぎちらしやアがつてそのあげ句が人力車で小塚原へおしだそと成とかん次のしみつたれめへおさらばづむとくじをきめたもんだから棟梁も八さんもそれなりになつてしまつたがエエコウおもしろくもねへ（中略）こちとらア（中略）附合（つづき）とくりやア（中略）ばつたん國までもゆくつもりだアあいつらとハ職人のたてがみがちがハ（中略）年中十の字の尻を右へびん曲るが半商売だけれど（中略）薙取なんぞラならべて売りやアがるのだアすソボンにお月さま（中略）ほどちらがあおしょくにんまだアぐず／＼しゃアがりやアすのうてんをたゞきわつて西瓜の立売にくれてやらはばかりながらほんのこつたが矢でも鎗砲でももつてこいおそれのじやアねへへへ」

以上のような明治以後の東京語にみられるベランメエ調を観察してみると、その各所に、江戸語における六方ことばとのつながりを認めることができる。六方ことばの一つの特徴とされる、終助詞の「モサ」などは、もちろん消滅し、関東「べい」も、ほとんど見られないが、ストレートな話しぶりや、促音・撥音をまじえた接頭語が、やたらに出でてくる点などには、やはり、江戸の下層町人や遊民から引き継いだ、六方ことばの名残りをとどめている。

ところで、東京の下町ことばには、こうした、ベランメエ調とは、まったく趣きを異にした、別の流れもある。下町文学を代表する久保田万太郎の戯曲に登場する、下町人士の語り口などが、それである。その例として、「久保田万太郎戯曲集（角川文庫）」の中の「不孝」の治兵衛のせりふを紹介してみよう。

「寅さんは、娘を朝鮮へやつて、みす／＼不仕合にしたとそのときは悔んだ。また、さうに違ひなかつた。が、十年経つてみると、娘さんは、あつちで仕上げて、すつかり仕合になつてかへつて来た。まへにしたいろ／＼の心配は、つまりは、何のこともなかつたんだ。……お前さんにしたつてさうだぜ。……跡取に死なれた。内儀さんに長煩ひをされた。火事で全焼（ましま）になつた。なるほど不運だつた。不仕合だつた。が、それがどうだといふんだ？——だから、いま、どうだといふんだ？……みんな痕にならない傷ばかりだつたぢやないか。……寅さんが仕合なら新さんだつて仕合だ。

……おしまはかういふい娘になつた。手のかかるものは誰もゐなくなつた。家中はいつの間にか明るくなつた。先刻、おしまにもさういつたが、今まで、こここのうちには、ゆとりといふも

のが微塵もなかつた。いつでも、家中が、揃つてみんな陰気な顔をしてゐた。……うそにも、それが、今まで飲んだことのなかつた酒を、また、からやつて一しょに新さんと飲むやうになつた。……今までのいさへざとは疾うにもう縁が切れたんだ。夜が明けて朝が来たんだ。さうじやアないか、寅さん……」

ちょっと間のびした、迂遠な話しぶりであり、テンポの早い、ストレートなベランメエ調とは、およそ似ても似つかない語り口であつた。

下町育ちの作家、小林信彦は、久保田万太郎の

——この間のあの十二人（註・戦後の落語家）は、当代に於ける一ト粒選りじやないのか？

——残念ながら、そうは……

——行かないか？

——ええ、まあ……

——やれ、それで安心した。あがれが、もし、当代に於ける代表選手たちだったら、おれは、どうしようかと思つた……

——やれ、それで安心した。あがれが、もし、当代に於ける代表選手たちだったら、おれは、どうしようかと思つた……

——やれ、それで安心した。あがれが、もし、当代に於ける代表選手たちだったら、おれは、どうしようかと思つた……

——やれ、それで安心した。あがれが、もし、当代に於ける代表選手たちだったら、おれは、どうしようかと思つた……

——やれ、それで安心した。あがれが、もし、当代に於ける代表選手たちだったら、おれは、どうしようかと思つた……

がちなしやべり方が、下町ことばの主流であろう。これは、明らかに、長屋住いの熊さん八さんのベランメエ調とは別ものの、大家の隠居の風格をしのばせる語り口である。江戸落語の面白味の一つは、六方ことばの系統に属する、テンポの早いベランメエ調と、御隠居さんの間のびした語り口との対照の妙にあるのではなかろうか。それはともかくとして、従来の東京語研究は、どちらかというと、山の手ことばの形成に重点がおかれて、下町ことばは、とかく軽視されがちであった。そして、下町ことばは、江戸の町人ことばの名残りとして片づけられてしまうことが多かつたようと思う。しかし、同じ町人ことばでも、大店を構える上層町人と、ともかくも一戸を構えるような中層の人々、さらには、裏長屋の住人の間では、かなりの差違が認められる。現代の下町ことばについても、日本橋と浅草では、ことばが違つたと主張する下町っ子もすくなくない。^(注6)こうして多様な下町ことばの中から、ベランメエ調をとりあげ、江戸初期の六方ことばとの結びつきを考えてみたわけである。細かい点では、論証の不十分なところが多いことと思うが、大筋の流れは、以上のようなことではないかと考えていい。

(注6) 小林信彦「小説にあらわされた東京弁」（『言語生活』二二五号）

(注7) 松村明「江戸語の性格」（『江戸語東京語の研究』）

(注8) 池田弥三郎「久保田文学と下町ことば」（『言語生活』六一号）。

秋永一枝「下町ことばは死語か」（『言語生活』六五号）